古語の解釈二題

――「於教経者一定現存」（『玉葉』）、「どッと笑ッてのきにけり」（『平家物語』）考――

西田直敏

古語の解釈に際して、陥りやすい誤りは、現在の自分が持っている言語意識や感覚で古語を判断してしまうことである。特に同じ語が現代にもある場合には、現代語の意味でとらえてしまうことになる。

古語の意味、用法を正しく理解するには、まず、その古語の存する作品の用例を収集し、分析することから始めなければならない。用例数が十分でない場合は、その時代の他の作品について同じ作業が必要になる。その用例の構文的、文脈的位置を抑さえて、意味、用法を帰納する。

本稿では、二つの語について考えてみようと思う。

一つは、九条兼実（一一四九―一二〇七）の日記『玉葉』の寿永三年（一一八四）二月十九日条に、二月十三日に一谷合戦で討ち取られた平家の首が都大路を渡されたことについて、「被レ渡之首中、於教経者一定現存云々」と書かれている「現存」の意味についてである。

いま一つは、『平家物語』巻九「生ずきの沙汰」の最後の一文「どッとわらッてのきにけり」の「どっと」の意味についてである。

一　「被渡之首中於教経者一定現存云々」（『玉葉』）の解釈――教経は生きているのか、教経の首が現にあったのか――

『平家物語』における平家方の侍将能登守教経は、一の谷の

合戦で、討取られたと、『吾妻鏡』には記されている。

本三位中将（頼朝）於明石浦、為景時家国等、被生虜。越前三位（義定）到湊河辺、為源三俊綱、被誅戮。其外薩摩守忠度朝臣、若狭守経俊、武蔵守知章、大夫敦盛、業盛、越中前司盛俊以上七人者範頼、義経等之軍中、所討取也。但馬前司経正、能登守教経、備中守師盛者遠江守義定獲之。八日　丁卯　関東両将自摂津国、飛脚進於京都、昨日於一谷、遂合戦、大将軍九人梟首、其外誅戮、及千餘輩之由、申之。（寿永三年二月七日、八日）

その後、平家の首を二月十三日に、京都で大路を渡して獄門にかけたとあり、十五日には範頼、義経等から飛脚が鎌倉に着き、合戦記録を頼朝に献じたとある。

其趣、去七日、於一谷合戦、平家多以殞殊命、前内府以下、浮海上、赴四国方、本三位中将生虜之、又通盛卿、忠度朝臣、経俊（已上三人、諸者討取之）経正、師盛、教経（已上遠江守義定者討取）敦盛、知章、業盛、盛俊（已上四人義経者討取之）此外梟首者一千餘人。凡武蔵、相模、下野等軍士、各所竭大功也、追可注記言上云々

この『吾妻鏡』の記事によれば、能登守教経は、一谷合戦で討死をしているのであるから、『平家物語』屋島の戦で、源義経の家臣佐藤三郎嗣信を一矢で射殺し、壇の浦の合戦で、敵の大将軍義経をめがけて迫ると、義経は、敵わじと隣の船にゆらりととび移り、危く逃れるという活躍ぶりは、全てフィクションということになる。

『吾妻鏡』は十三世紀後半から十四世紀初頃の成立とされる。源平の戦い当時の記録としては、九条兼実の日記『玉葉』の寿永三年二月十三日に平家の首が渡されたことが記されている。

十三日壬申雨降、午後頗晴、此日被渡平氏首、其数十云々公卿頭不可被渡之由、雖有其議、武士猶鬱申云々如何、通盛卿首同被渡了、可弾指之世也。

そして、二月十九日条に、次の記事がある。

伝聞、平氏帰住讃岐八島、其勢三千騎許云々、被渡之首中、於教経者一定現存、云々、又維盛卿三十艘許相卒指南海去了云々、又聞、資盛、貞能等、為豊後住人等乍生被取了云々、此説、日来雖風聞、人不信受之処、事已実説云々

この『玉葉』の記事の解釈をめぐって、二つの解釈が行われている。

A説　渡された首の中に教経の首が確かにあったと解する説。

渥美かをる『平家物語の基礎的研究』、市古貞次編『平

家物語研究事典』（「教経」の項、山下宏明執筆）、奥富敬之「平家物語の史料論」（杉本圭三郎編『平家物語と歴史　あなたが読む平家物語3』有精堂　一九九四年所収）

B説　教経の首は贋首で、屋島に本人が生きていると解する説

冨倉徳次郎『平家物語全注釈　下（一）』、安田元久『平家の群像』、杉本圭三郎『平家物語　全訳注』（講談社学術文庫　一九八八年）、平田俊春『平家物語の批判的研究』（国書刊行会　一九八九年）

対立する二つの説は、「現存」の解釈の違いによるものである。A説は、渡された首の中に教経の首が確かにあったとするものであり、B説は、渡された首の中で、教経は確かに生きているとするものである。

本稿で、私は、B説の正しいことを語学的に論証しようとするものであるが、その前にA説の最も新しい奥富敬之氏の説を見ておこう。

奥富氏は、『吾妻鏡』寿永三年二月七日、十三日、十五日の記事から、次のように述べる。

一ノ谷合戦で教経は戦死したと、『吾妻鏡』は主張しているのである。

そして、『玉葉』寿永三年二月十九日条には、この日、一ノ谷合戦での平氏の戦死者の首が梟首されたと記した上で、つぎのようにも記している。

被渡之首中、於教経者、一定現存[云々]、又維盛卿三十艘許相卒指南海去了[云々]。又聞、資盛、貞能等。為豊後住人等、乍生被取了[云々]。此説、日来雖風聞、人不信受之処、事已実説[云々]。

つまり『吾妻鏡』、『玉葉』ともに、教経は一ノ谷合戦で戦死したとする。この点について『吾妻鏡』の記事の誤りとされたのが『『吾妻鏡』の研究』の八代国治氏である。

八代氏の疑義は、二点ある。『玉葉』で教経の首が「現存」と書いたあと、「此説、日来雖風聞、人不信受之処、事已実説」とあって、九条兼実らが教経の戦死を疑っているというのが、その第一点である。

第二点は、源平合戦終結直後の文治二年（一一八六）に、僧慶延が著わした『醍醐雑事記』に、次ぎのような記述があるからというのである。

一、去三月廿四日、於長門国平家与源氏合戦、平家被打了。源氏大将軍九郎判官義経

生取

内大臣宗盛　右衛門督清宗
大納言時忠　讃岐中将時実
（中略）
自害
中納言教盛　中納言知盛
能登守教経
殺人
（略）

八代氏の疑義の第一点は、『玉葉』の記述を再読すれば、すぐに解明される。「信受」せずに疑っているのは、文章での直前の「又聞」以下あるいは「又維盛卿」以下のことであり、教経の首は「一定現存」という箇所までは、かからないものと読めるからである。

また「醍醐寺雑事記」の記述は、これこそ僧慶延が犯した誤りではなかっただろうか。

（中略）

とにかく『玉葉』には、教経の首は「一定現存」したと記されているからである。

このように見てきて、教経は一ノ谷合戦で戦死したのだとすると、続く屋島・壇ノ浦などでの活躍も、これまた無かったことになる。つまりは屋島ノ合戦での義経の八艘飛びなども、すべて疑わしくなってくるのである。

さて、問題は、極めて単純である。「一定現存」という『玉葉』の解釈の問題である。

奥富説は、都で平氏の首が梟首されたのが『玉葉』寿永三年二月十九日条に記されているように書かれているが、既に掲出したように、これは二月十三日条に記されている。

問題の箇所について、奥富氏は、「被渡首中……」から引用して考察しているが、これは、引き方を誤っている。「伝聞、平氏帰住讃岐八島、其勢三千騎許云々、被渡之首中、於教経者一定現存云々」という文脈で考えれば、「平氏は八島に逃げ戻った、その勢三千騎というが、その中に、首が渡された教経が確かに生きているという」という意味が素直に出てくる筈である。

『玉葉』を検してみると、教経の首が賈首であったというような風聞などは記されていないのに、なぜここで、教経の首が「一定現存」を確かにあったと解釈しなければならないのか、疑問を持つべきである。それに決定的な問題は「現存」を「現にある」と安易に解釈したところにある。

「現存」の意味を確定するには、『玉葉』における九条兼実の用法を検討してみるのが第一である。

源平合戦の幕開けは、治承四年（一一八〇）五月の高倉宮以仁王と源三位頼政の挙兵である。宇治での戦で、検非遣使、景高、忠綱以下三名余騎が頼政軍五十余騎と戦い、頼政、兼綱以下を打取ったが、宮の首は、はっきりせず、平時忠は兼実に「於宮者慥雖不見其首、同伐得了」といい、平等院の執行良俊から使者が来て「殿上廊内、自殺之者三人相残、其中具有無首之者一人、疑者宮歟云々」と報告している。

ここから、高倉宮生存説の風聞が都に更々流れることになる。治承四年十月になって、兼実は『玉葉』にこう記す。

八日丁亥〔天〕晴、入夜伝聞、高倉宮必定現存、去七月下着伊豆国云々、当時御座甲斐国、仲綱已下相具祇候云々。但不能取信、凡権勢之人、依悪邵事、失人望之間、如此之浮説流言、不可勝計歟、誠不便事歟。

十九日戊戌　或人云、高倉宮被誅伐之由、猶有疑、其故、菅冠者云〔冠〕男、年来参彼宮、住吉辺ニ居住、宮渡御三井寺之後、〔白地〕参入、依非武勇之者、即欲退出之間、忽逃去、不慮之外奉相具、向南都之間、於路被伐了、件男年令卅余歳、容貌非醜、頗以優美、弾和琴吹横笛云々。称被誅戮之由宮、若此人歟云々。件男参彼宮之由、世人遍不知之、被殺害之由、又以日来不風吹、此間知此子細之鍾謳歌云々。但宮若現存者、争数月之間、其実不風聞哉、猶不被信受事也

高倉宮生存の噂は、数か月にわたって都に流れていたらしい。兼実は、「高倉宮必定現存」「宮若現存者」と使っているが、この二例いずれも「現存」は「現に生存している」の意味であることは明である。A説の如く、「首がある」の意味では用いられてはいない。

では、「首がある」の意味で使われている語は何か、『玉葉』元暦元年八月十八日条に、文覚が源義朝の首を源頼朝に届けるために鎌倉に向ったという記事がある。そこでは、「在」が用いられている。

十八日甲戌（中略）又云、義朝首干今在囚間、而可被免罪、其間事可勘申之由、為泰経奉行、被仰下了、橘逸勢等有此例云々。可復本位之由可被仰下歟。申其旨了云々。（中略）或人云、文覚聖人上洛、取在獄之義朝之首可向鎌倉。

A説は、『玉葉』の解釈を誤ったものである。

以上によって、『玉葉』の寿永三年十九日条の「被渡之首中、於教経者一定現存云々」の記事は、教経が屋島に生きている

ことを述べたもので、首渡しで渡されたのは贋首であったことになる。

「本稿は、一九九五年一一月八日、甲南女子大学国文学会秋季研究発表会において発表したものである。」

二　「どッとわらッてのきにけり」（『平家物語』巻九　生ずきの沙汰）――笑ったのは誰か――

『平家物語』巻九「生ずきの沙汰」の最後の部分は、木曽義仲討伐のために出陣するに当り、源頼朝に、名馬いけずきを賜りたいと願い出た梶原景季には、するすみを与え、佐々木四郎高綱には、頼朝は、何を思ったか、いけずきを与えた。

駿河国浮嶋が原で二人は出会う。梶原景季は、佐々木四郎高綱にいけずきが与えられたと知って激怒する。「ここで佐々木にひッくみさしちがへ、よい侍二人死で、兵衛佐殿に損とらせたてまつらん」と、さしちがえる覚悟で、まず詞をかけた。

「いかに佐々木殿、いけずき給はらせ給ひてさうな」といひければ、佐々木「あッぱれ、此仁も内々所望するときゝし物を」と、きッとおもひいだして、「さ候へばこそ。此御大事にのぼりさうが、定て宇治・勢田の橋をばひいて候らん、乗ッて河わたすべき馬はなし、いけずきを申さばやとはおもへども、梶原殿の申されけるにも、御ゆるされないとうけ給る間、まして高綱が申ともよも給はらじとおもひつゝ、後日にはいかなる御勘当もあらばあれと存て、暁たゝんとての夜、とねりに心をあはせて、さしも御秘蔵候いけずきをぬすみすまいてのぼりさうはいかに」といひければ、梶原この詞に腹がゐて、「ねッたい、さらば景季もぬすむべかりける物を」とて、どッとわらッてのきにけり。

ここで、問題にしたいのは、「どッとわらッてのきにけり」という結びの句の「どッとわらッて」である。

諸注釈書は、梶原が「高らかに笑って、その場を去っていった。」と解釈している。

評論家小林秀雄は、かって、こう評した。

「金覆輪の鞍置かせ、小統の眸かけ、白轡はげ、白泡かませ、舎人あまた附たりけれども、なほ引きもためず、跳らせてこそ出来たれ」。これは又佐々木四郎の出立ちでもある。源太景季これを見て、佐々木とさし違え、「よき侍二人死んで、鎌倉殿に損取らせ奉らむ」と飛んだ決心をアッと思う間にして了うのもなかなかよい。佐々木から、盗ん

だ馬と聞かされると、「ねったい」と大笑いしてさっさと行って了う。まるで心理が写されているというより、隆々たる筋肉の動きが写されている様な感じがする。事実そうに違いないのである。この辺りの文章からは太陽の光と人間と馬の汗とが感じられる。そんなものは少しも書いてないが。

（「平家物語」一九四二年）

確かに、構文的には、「どッと」という副詞は「笑ふ」の連用修飾語であるから、「梶原景季がどっと笑って」と理解するのは自然である。が、「どっと」という副詞は、ひとりの人間・梶原景季が高笑いをしたことを形容するのに適切な用語なのであろうか。というのが私の疑問である。

『平家物語』には、「どっと」は、金田一春彦他編『平家物語総索引』（学研）によれば、二〇例ある。その全ての用例を、次に示す。

1 六波羅の兵ども、直甲三百余騎待うけ奉り、殿下をなかにとり籠めまいらせて、前後より一度に、時をどッとぞつくりける。（巻一　殿下乗合）

2 あくる卯剋におしよせて、時をどッとつくる。（巻一　鵜川里）

3 六波羅より源大夫判官季貞、摂津判官盛澄、直甲三百余騎、河原坂の宿所へ押寄て、時をどッとぞつくりける。（巻三　行隆之沙汰）

4 或夜おほ木の倒るゝ音して、人ならば二卅人が声して、どッとわらふことありけり。（巻五　物怪之沙汰）

5 平家は四万余騎を二手にわかって、奈良坂、般若寺二ケ所の城郭におしよせて、時をどッとつくる。（巻五　奈良炎上）

6 人ならば二三十人が声して、「うれしや水、なるは瀧の水」といふ拍子を出して舞ひ踊り、どッとわらふ声しけり。（巻六　築島）

7 合図を定めて、七手がひとつになり、一度に時をどッとぞつくりける。（巻六　横田河原合戦）

8 溺手の勢一万余騎、くりからの堂の辺にまはりあひ、えびらのほうだて打たゝき、時をどッとぞつくりける。（巻七　倶梨迦羅落）

9 木曽篠原に押し寄せて時をどッとつくる。（巻七　篠原合戦）

10 虚空に人ならば千人ばかりが声で、どッとわらふ事ありけり。（巻七　還亡）

11 一陣より五陣まで兼て約束したりければ、敵を中にとりこ

12 めて、一度に時をどッとぞつくりける。（巻八　室山）
木曽「さないはせそ」とて、時をどッとつくる。
（巻八　鼓判官）

13 「ねッたい、さらば景季もぬすむべかりける物を」とて、どッとわらッてのきにけり。（巻九　生ずきの沙汰）

14 敵も御方もこれをきいて、一度にどッとぞわらいける。
（巻九　宇治川先陣）

15 四塚にいくらも馳むかふたる敵の中へかけ入、大音声をあげて、「此御中に、甲斐の一条次郎殿の御手の人や在ます」ととひければ、「あながち一条次郎殿の手でいくさをばするか。誰にもあへかし」とて、どッとわらふ。
（巻九　樋口被討罰）

16 源氏一万騎おしよせて、時をどッとつくる。
（巻九　三草合戦）

17 「今は時よく成ぬ。よせよや」とて、時をどッとつくる。
（巻九　二度之懸）

18 おとしもはてねば、時をどッとつくる。（巻九　坂落）

19 堀のかたよりをしよせて、時をどッとつくる。
（巻十一　勝浦）

20 直甲四五十騎門の前におしよせて、時をどッとぞつくりける。（巻十二土佐房被斬）

『日本古典文学大系』は、龍谷大学図書館所蔵本を底本にしているが、東大国語研究室所蔵高野展之旧蔵本では、龍大本で「はッとわらひ」とある次の二例がいずれも「どっとわらひ」になっている。

21 わかき公卿殿上人こらへずして一同にはッ（東大本）どッと わらひあへり
（巻三　公卿揃）

22 岡の御所と申すはあたらしう造られたれば、しかるべき大木もなかりけるに、或夜おほ木の倒るゝ音して、人ならば二卅人が声して、どッとわらふことありけり。是はいかさまにも天狗の所為といふ沙汰にて、ひきめの当番と名づけて、夜百人昼五十人の番衆をそろへて、ひきめを射させらるゝに、天狗のある方へ向いて射たる時は音もせず、ない方へ向いて射たる時は、（東大本）どッと はッとわらひなゞどしけり
（巻五　物怪之沙汰）

東大本の用例を考慮して、二二例で考えてみると、「時をどッとつくる」一四例、「どッとわらふ」八例になる。13の問題の「どッとわらッてのきにけり」以外は、「二三十人が声して」（4・6）、「千人ばかりが声で」（10）、「一度に」（14）、「わかき公卿殿上人」（21）、15の場合は、「（多数の敵が）どッとわら

ふ」のである。22の「天狗」の場合、その前に「人ならば二三十人が声して」とあるのと同じである。

現在の用法でもそうであるが、「どっと」という副詞は、多人数が一度に声をあげるさまを形容する。つまり集団の声の形容である。『平家物語』の用例の中に、「人ならば二三十人が声して、どッとわらふ」が二回でてくるが、これは、「どッと」によって形容する声が少なくとも二三十人以上が一度に笑う場合に用いられることを示していると言える。

一七世紀初めに、『日葡辞書』は、"Dotto"を「大勢の者が一緒に笑ったり、叫んだりなどするさま。例 Toqiuo dotto agumu.」(『邦訳日葡辞書』)と説明している。

つまり、以上の考察から、問題の文は、一見、梶原景季が豪快に高笑いをして、去って行ったと読み取れそうであるが、「どッと」の用法から見ると、そうは取れないということになる。「どッと笑った」のは、梶原景季ではなく、景季と佐々木四郎のやりとりをまわりで聞いていた、少なくとも二三十人の人々が、景季の「ねったい、さらば景季もぬすむべかりけるものを」と、口惜しがり、愚痴る姿を一緒に笑ったということになる。従って、この場面をとらえて、

佐々木は、景季から問いかけられて、即座の機転でその憤懣をかわしてしまうあざやかな対応によって、人間的風貌をきわだたせているが、この言葉に、たちまち怒りをといて、「ど(ッ)とわら(ッ)て」その場を離れる景季の、明朗闊達で、なんの屈託もない性格も、よく描き出されている。『平家物語』における人物造型のなかでも、とくに作者の創造力がはたらいて、東国武士の人間像を彫りふかくいきいきととらえた場面のひとつである。

(杉本吉三郎『平家物語　全訳注』講談社学術文庫)

のように評されるのが一般的であるが、語学的見地から見ると、再考の余地があると言わざるをえない。「どっとわらふ」は、個人の高笑いの形容には用いられない。集団の笑いの形容なのである。これが『平家物語』における語の用法である。

では、どうして、現代的解釈が生じたのか。

四部合戦状本や長門本は、

源太腹居妬景季不盗云　(四部合戦状本)

梶原うちうなつきて、腹いたりけにてねたひ、さらは景季もぬすまてとそ申ける　(長門本)

のように、「云(いひける)」「申ける」であっさり終っている。

これに対して、延慶本は、

梶原思ケルハ、「ゲニ我モヌスムベカリケル事ヲヤ。ツヤ

〳〵思ヨラズシテ、佐々木ニハヤヌスマレニケリ。アタラ馬ヲ終ニソラシヌル事コソ念ナケレ。穴口惜〳〵」トゾ思ケル。サテ申ケルハ、「弓矢取ノ郎従ノ主ノ馬ヲヌスミテ主ノ敵討ニ趣ム事、何条ノ御勘当カ候ベキ、馬盗人ヲバ頸ヲキリ、ハ(ッ)ツケナドニスル事也。マシテ同僚ニハシタガラヌ事ナレドモ、佐々木殿ノ盗ハアエ物ニモシタシ、男子生タラム産所ニハ請ジ入レマヒラセテ、引目ヲモ射サセマヒラセ、元服袴着ノ時ハ横座ニスヘマヒラスベキ程ノ盗哉」トテ、打ツレテゾ咲ケル。

と、心中に思ったことと裏腹に、高綱のいう通りを信じて、その盗みをくどくどと讃美し、「打ツレテゾ咲ケル」と、二人で笑いあったと書いている。

『源平盛衰記』では、高綱の口から出まかせの虚偽の弁解を、源太誠と心得て、「げに〳〵佐々木殿輒くも盗み出し給へり、此の定ならば景季も盗むべかりけり、正直にては能き馬はまうくまじかりけり」と狂言して、打連れてこそ上りけれ。

とあって、「狂言して」つまり「冗談を言い」いっしょに京上したとなる。

こうしたところに周囲の笑いを醸し出す要素がある。が、延慶本にしろ、源平盛衰記にしろ、梶原景季の笑いは、わだかまりのない底抜けの哄笑というものではない。屈折した笑いである。

では、覚一本は、どうして「どッとわらッてのきにけり」と書いてあるのか、「梶原この詞に腹がゐて」と、単純に、佐々木四郎の虚言を信じて、「ねッたい、さらば景季もぬすむべかりける物を」(畜生、そんなことなら俺も盗めばよかった)と、笑ったとすれば、その笑いは、いけずきを盗み出すことに思い至らなかった自嘲の笑い、或は、「畜生、うまいことやりおって、こいつめ」という、いまいましさのこもった苦笑いであったろう。

覚一本の最初の形は、「梶原この詞に腹がゐて……笑ってのきにけり」であったかも知れない。

『平家物語』(覚一本)には、「笑ふ」三五例があるが、既に述べた「どっと笑ふ」以外に、修飾語のついたものは少く、大半は、「文覚わらッて」(巻五　文覚被流)、「兵衛佐わらッて」(巻八　征夷将軍院宣)の類である。連用修飾語のついたものを見ると、

木曽大にわらッて　(巻八　猫間)

蔵人大にわらッて　(巻十二　泊瀬六代)

蔵人大にわらはれけり　（巻十二　泊瀬六代）

侍ども梶原におそれてたかくはわらはねども　（巻十一　逆櫓）

女房達「中納言殿、いくさはいかにやいかに」と口々にとひ給へば、「めづらしきあづま男をこそ御らんぜられ候はんずらめ」とて、から〳〵とわらひ給へば、　（巻十一　先帝身投）

だけである。つまり、「大に」「高く」「から〳〵と」である。

景季が快く笑ったとすれば、「から〳〵とわらひてのきにけり」となる筈である。また、「大いにわらひてのきにけり」「高くわらひてのきにけり」という表現もありうる。これらの表現は、景季個人の笑いである。しかし「どッとわらひてのきにけり」となると、既に述べたように、集団の笑いである。

景季が「ねッたい、さらば景季もぬすむべかりける物を」と言ったことに対して、周囲の人々がどっと笑って、景季は去っていったということになる。

使用テキスト

平家物語　覚一本　日本古典大系（岩波書店）一九六〇年

四部合戦状本　汲古書院　一九六七年

延慶本　勉誠社　一九九〇年

長門本　福武書店　一九七七年

源平盛衰記　日本文学大系（国民図書）一九二七年

玉葉　名著刊行会　一九九三年